長野工業高等専門学校紀要第 55 号（2021）1-9

北宋徽宗時代の転換点について
――『清明上河図』と『千里江山図』の間*

久　保　田　和　男*1

The turning point in the Emperor Huizong era of the Northern Song
― amang "Qingmingshanghetu " and "Qianlijiangshantu"

KUBOTA Kazuo

The paper is a study of the Emperor Huizong era of the Northern Song Dynasty. The Huizong era is known in Chinese history as an era of painting innovation under the guidance of the emperor. Among them, the famous paintings are "Qingmingshanghetu 清明上河図" and "Qianlijiangshantu 千里江山図". The time when the two paintings were made is about 10 years apart.Between the two, there was a transformation of painting. This is thought to indicate not only the transformation of paintings, but also the differences in Huizong's political culture.

キーワード：徽宗，蔡京，彗星，『清明上河図』，寒冷化，『瑞鶴図巻』，元符皇后，『千里江山図』

はじめに

近年、徽宗時代の絵画について研究が進んでいる。東京国立博物館より刊行された『決定版「清明上河図」』には、『清明上河図』が原寸大で全部収録されており、精緻な描写で知られるこの図巻をリアルに再現している。それだけでなく、巻末にはすべての跋文の録文と訳読が付されている。その間には、日中加の『清明上河図』（北京故宮博物院藏、石渠宝笈三編本）研究者が論考を寄せ現在の研究の到達点を知ることができる。一方、もう一つの同時代の名画『千里江山図』（北京故宮博物院藏）についての国際的な論文集『千里江山図的故事』も、故宮出版社より 2017 年に出版されている。好一対である。本稿は、徽宗時代の転換点を巡るいくつかの問題を扱うことで、「転換」をより立体化して示そうという試みであるが、その一つの面が絵画史研究によって明かにされたいくつかの問題である。この両書に寄せられた諸論考に大きな示唆を受けたことをまず申し述べておく。

さて徽宗の政治史については藤本猛氏の『風流天子と君主独裁制―北宋徽宗朝政治史の研究―』という専著がある。以前、この大著にたいする拙評を書いたことがある。藤本氏は徽宗朝史を、徽宗が宰相蔡京に政治を委任して新法政治を行っていた前半と、徽宗が蔡京を宰相としながらも対立し、徽宗独自の皇帝親政をおこなうようになった後半に分けてとらえる。この政治史のとらえかたには私も同意する。ただし、美術史研究より、皇帝徽宗がその芸術作品を政治的に利用していたことが指摘されてきている。特に作品を通じた蔡京との関わりについて明らかにされており注目される。

また、以前紹介したことがあるが、靖康の変の時、宋人たちは金の攻撃とともに空前の寒波に苦しめられていた。歴史気象学の知見によると、徽宗が即位した 1100 年ごろよりこれまで温暖だった中国の気温は下降に転じている [1)]。なお、1106 年に出現した彗星は歴史的なグレートコメットとして天文学で研究されていることがわかった [2)]。本報告は、このような周辺諸科学の知見も取り入れながら、徽宗朝の政治文化の転換点を再考する試みである。

＊　2021 年 9 月 12 日　第 229 回 宋代史談話会にて報告
*1 一般科教授
原稿受付　2021 年 5 月 20 日

1. 彗星と改元

徽宗時代は、改元が頻繁に行われている。一年で終わった「建中靖国」、5 年の「崇寧」、4 年の「大観」となり、比較的短時間で終わった年号が前半である。後半は「政和」（8 年）三ヶ月で終わった重和、「宣和」（7 年）である[3]。

哲宗は元符 3 年（1100 年）の正月に崩御し徽宗が即位したが、宋朝は原則として踰年改元を取っていたため、1101 年の正月になって「建中靖国」と改元されている[4]。新旧両党の融和を指向する年号だと考えられている[5]。ただし、すぐに徽宗は紹述政治に舵を切る。そのため翌年早くも熙寧を尊ぶという「崇寧」と改元される。そのために宰相として登用されれたのが蔡京であった。蔡京は、新法政治をおこない、旧法派（元祐党人）のパージを徹底的に実施する。元祐党藉碑が全国に立てられた。

ところが、崇寧 5 年（1106）1 月、西方の空に彗星が出現する。この彗星は、数十年に一度の確率で見られるような大彗星（X/1106　C1）であった。『宋史』天文志では、6 丈（約 60 度[6]）の尾が観測され、「光芒散出、如砕星」[7]と述べているが、これはどうゆうことなのだろうか。

何度も回帰したこの彗星は軌道やその姿はよく研究され[8]、クロイツ群彗星と総称[9]される極めて太陽に接近する特異な軌道をとる一連の彗星の母彗星と考えられている。つい最近の接近は 1965 年のことで、二人の日本人コメットハンターが世界に先駆けて発見したため、「池谷・関彗星」（本頁の写真）と命名された。この彗星は明け方の空で明るくなり、長い尾（約 40 度）が見られた。同年 10 月に近日点を通過した際には満月より明るくなり、20 世紀有数の大彗星になった。太陽の極めて近い軌道を通ったため（Sungrazer と称される）[10]、彗星の核は二つに分裂し、二つの彗星となって太陽系の外側に去っている。

池谷・関彗星は、「崇寧 5 年の彗星」の分裂した一方であると考えられている。別の片割れは、「1882 年の大彗星」として欧州では有名である。なお、1110 年（大観 4 年）に徽宗に再度の改元を促した彗星も「崇寧 5 年の彗星」と 326 年に近日点を通過した際に分裂した片割れであった。つまり、前掲の『宋史』の史料も、彗星の分裂を宋朝の天文官が観測した結果なのである。

大観と政和の二回の改元は彗星が出現したことが

理由となっている。彗星が出現したからと言って、改元しないという選択肢もある。神宗、熙寧 7 年（1074）に彗星があらわれたが、王安石は「天変を恐れず」として、政治的な影響を拒否した[11]。これは欧陽脩らからはじまる天人相関説を否定する宋学的な天観によるものだといえよう[12]。唐代以前は、彗星による改元は非常に多いのであるが、宋代以降は激減する（明清は一世一元）。

一方徽宗は違った。宋代で彗星出現による改元が、しかも二回連続で行われたのは徽宗時代だけである。徽宗のパーソナリティがここには反映したと考えられる。

徽宗は元符 3 年（1100）、兄の急死にともない意に沿わないながら欽聖皇太后向氏の意向によって皇帝の地位に即くことになった。即位を固持するが断り切れず垂廉聴政してもらう。新旧両派の融和をはかった向太后の死後、父の政治を継承する紹述政治に舵をきるが、それは兄の方針を受け継いだものであり、神宗に仕えた「元豊の侍従」蔡京に政治の主導権があった。

崇寧 5 年（1106）の大彗星出現に際して徽宗は主体性を発揮する。「彗星初めてあらわれ、上、震動し、己を責め、深く（蔡）京の姦を察し、これより旬日の間、凡そ京のつくる所のものは、一切罷去」[13]している。徽宗は彗星の天譴を信じ、その原因を宰相蔡京の政治に帰す。全国に作られていた元祐党籍碑は破壊される[14]。紹述政治は中断され、蔡京は宰相を罷免される。

大観 4 年（1110）にも別の彗星（同じクロイツ群）が現れ再び改元される。蔡京は今度は開封から追放されるに至る。徽宗と蔡京の人間関係はこのような展開のなかで冷め切ると想像されるが、そこが違うのがこの両者の特殊な関係である。後述したい。

2.『清明上河図』の制作と外戚向宗回の失脚

徽宗時代の名画として伝えられる『清明上河図』（石渠宝笈三編本、北京故宮博物院藏）は、文献的な史料が跋文の記述に限られている。したがって、この図の制作時期については不明な点が多かったが、近年は、徽宗時代前半、崇寧元年（1102）～大觀２年（1108）年ごろと考える論者が多い（余輝、板倉[15]）。理由としては、1、絵画に用いられている皺法の年代的分析　2、この図が外戚向氏に下賜されてことが、跋文から明らかであること。3、画中の女性の服装など、が挙げられている。この時期とすれば、大彗星の出現によって徽宗が苦悩している時期に本図巻が徽宗の前にあったと想定することも可能であろう。

『清明上河図』の画題については諸説ある。『決定版』に所収の諸論文でも、①宋朝の危機を描いた諫言の隠喩、②幸福な民衆の生き様を描いた吉兆図という二説が対立している。ストレートな文献資料がないため、画面の情報などから、諸説が唱えられているのである。筆者は、以前から②の説に左袒し、「清明豊昌」の世界を描いた吉兆図とする考えを示している[16]。

『清明上河図』の画家について最も重要な情報を提供するのが金人張著の跋文である。

> 翰林張擇端、字正道、東武人也、幼讀書、遊學於京師、後習繪事、本工界畫、尤嗜於舟車、市橋郭徑、別成家數也。按向氏評論圖畫記云、西湖爭標圖、清明上河圖、選入神品、藏者宜寶之、大定丙午清明午一日、燕山張著跋[17]。

これによると、翰林院の画家張択端は、若くして読書に励み開封で学んだという。最初は儒学を学んだのであろう。その後、画業に転じ大成したとあるから、科挙に合格できなかった士人だったと考えられる。翰林図画院に入った張択端が得意だったのは、界画というジャンルだった。建造物や船舶、車両などを描くのに巧みだった。翰林図画院は、皇帝のための絵画を描く組織である。『清明上河図』の画材は、5 メートルに及ぶ高級な官絹である。塚本麿充氏によると、『清明上河図』の幅は 24.8 ㎝であり、これは、『瑞鶴図』『千里江山図』（51．5 ㎝）など当時の徽宗らが描いたとされる絵画の幅の二分の一である[18]。すなわち、当時の翰林図画院で標準に用いられた絹布を横に半分に切り分けた画布[19]に描かれた長巻だったのである。皇帝直属の宮廷画家が、①説のように、諫言として図巻を描くという説には首肯できない。

徽宗の芸術コレクション[20]については、業績が積み重ねられているが、政治的な役割を考えることが行われるようになった。本稿もその一つである。徽宗画院から生み出されたこの長巻の政治的な機能をさぐるにはどのような糸口があるのであろうか。

後述するように徽宗時代は北宋時代のなかで、祥瑞の出現報告が異次元に多い。徽宗時代特有の現象なのである。『清明上河図』はこのような政治文化の中で作製された吉兆図であり祥瑞なのである。

先述したように大彗星出現によって徽宗は「震動」した。一方で、張択端が丹念に描いた『清明上河図』が徽宗によって鑑賞されていたのが、崇寧末年の出来事であった。ただし、徽宗はこの『清明上河図』を手元には置かず臣下に下賜したらしい。下賜された臣下はそうとうな大物であろう。この下賜には、何らかの意義があるはずである。

跋文からは『清明上河図』が『向氏評論圖畫記』なる書物に記録され、「向氏」から神品として高い評価を受けていたことがわかる。この書についても多くの議論があるが、基本的に外戚向氏のコレクションの記録であると考えられている。さらに楊新氏は『清明上河図』が向氏一族（向宗回・向宗良）に下賜されたものだったとする[21]。

かれらは、徽宗を皇位に就けた向太后の弟たちである。欽聖向太后は神宗の皇后である。哲宗や徽宗の生母ではなかったが、哲宗の急死に際し、哲宗時代後半に専権をふるった宰相章惇の反対を退けて、徽宗即位を実現した。徽宗からの依頼もあって、最初の数ヶ月垂廉聴政をするものの辞退し、その年のうちに急死してしまう。したがって向氏兄弟は徽宗にとっては大恩がある一族である。徽宗は彼らに実職はともなわないが高位高官（開府儀同三司、安康郡王など）を与え厚遇している。宋代の外戚で王位に至ったのは、この向宗回が二例目であった[22]。

この向宗回だが、郡王という高い地位にあった大觀２年（1108）に下獄する。

> 二年、宗回の「帷薄不修」を告ぐる者あり。開封府をして鞫治せしめ、御史中丞呉執中、臨問す。使うところの季吹笙を召し、宗回の女並びに張響鐵等を引きて、驗問し、具さにその實をう。遂に太子少保をもって致仕せしむ。
>
> 執中言わく、陛下、宗回の元舅の故を以って、これに法を致すに忍びざれば、天下をいかんせん、と。
>
> 詔して曰く、宗回は、欽聖憲肅皇后において親弟たり、朕は噬膚の恩を以って、法を行うに忍びず、と。その在身の官爵を削奪し。郴州安

置とす。行くこと一二日。追還せしむ。逾年（イチネンゴ）、盡く故職を復す[23]。

この史料にあるように、「帷薄不修」という罪で開封府と御史中丞呉執中[24]による取り調べを受けている。「帷薄不修」とは、男女の破廉恥な状況をさすようである。詳細は不明であるが、王位にあった向宗回は重罪に問われることになり位階はすべて剥奪される。ただし、徽宗の恩赦によって死罪だけは免れ流罪（郴州安置[25]）となる。

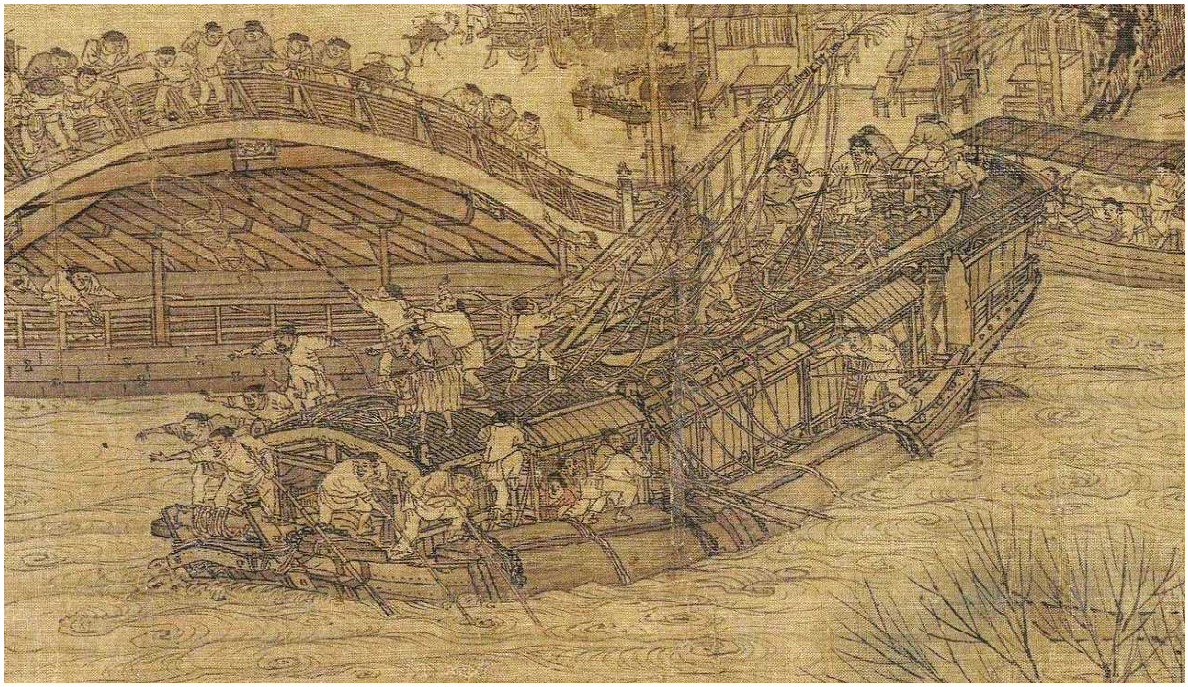
興味深いのは『清明上河図』はこの事件の前に完成していることである。下賜されたタイミングは文献からは判然としないが、この下獄と下賜は関係しているのではないだろうか。

先述したように「大観４年（1110）の彗星」の出現により、蔡京を杭州に追放（杭州居住[26]）しているが、それに先だって、徽宗は、自らが制作したとする、『雪江帰棹図』（北京故宮博物館蔵）[27]を蔡京に鑑賞させ跋文を書かせている。この図巻は、江南の山水を描いた作品であるが、中央に小さく櫂を操る老漁夫が描かれている。彭慧萍氏は詳細な分析を通じて、漁夫は蔡京を意味し江南に左遷するがやがて帰京させることをほのめかした作品とする[28]。

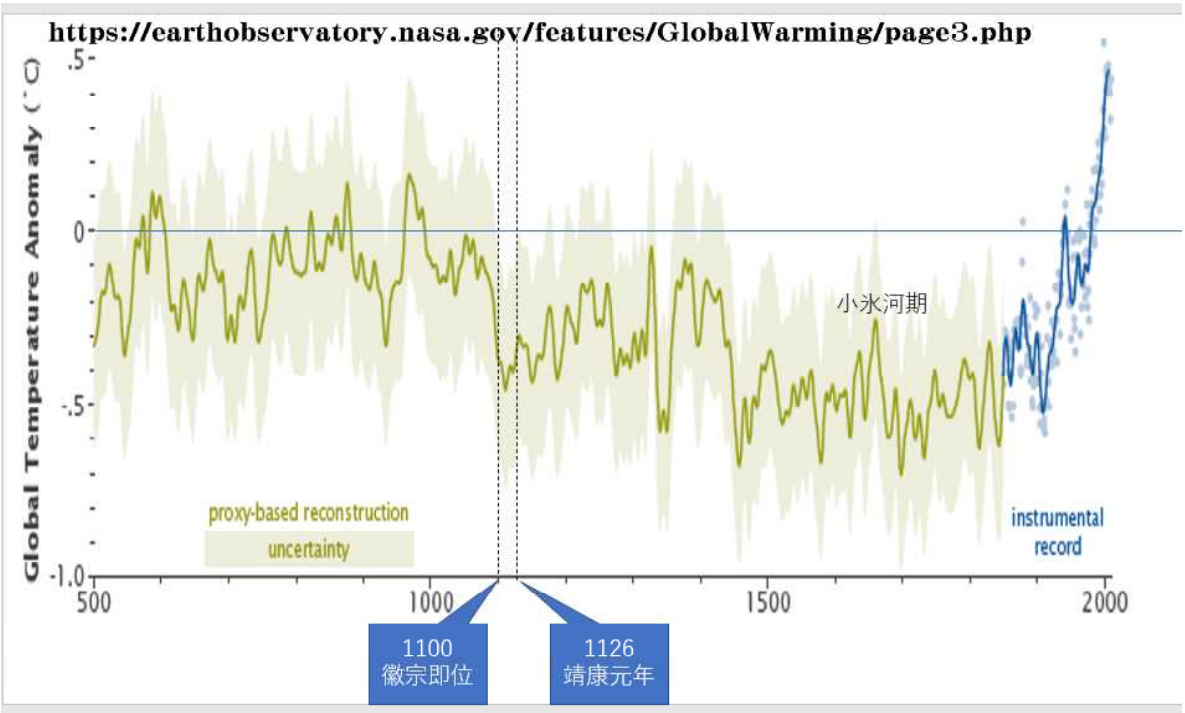
大觀２年（1108）に死一等を減じられた向宗回も郴州（湖南省）安置の処分となったが、数日で帰京を許された。『清明上河図』の向宗回への下賜についても、『雪江帰棹図』蔡京題跋と同様なことが考えられないだろうか。徽宗が気遣っているということを暗に伝える役割を持ったものだったのではないか。このような仮説によって再び『清明上河図』を見てみる。図巻が描くのは田園から開封に上京する船舶と乗員を描いている。図巻の鑑賞者（向宗回）には、江南から開封に帰ることをほのめかされたと映ったことであろう。

5 メートルに垂んとする『清明上河図』の中央には虹橋が描かれている。橋の下には汴河の急流に押し流されコントロールを失いかけている一艘の運河船がみえる。橋から投げられたロープを結びつける作業の指揮を執っているのが、一人の女性である。この女性がこの図巻の主人公であると考える研究者もいる[29]。少なくとも、この長巻を徽宗から下賜された向宗回らは、皇帝急死という北宋の危機を救った向太后の姿として絵解きをしていたかもしれない。

とまれ徽宗を巡る政治体制において、ここで王位を与えられるなど厚遇を受けていた外戚向宗回が破廉恥なスキャンダルによって失脚したことは一つのメルクマールになろう。向氏は蔡京とも深い結びつきを持ち政治的な影響力も持っていたと考えられる[30]。先述したように翌年の大観３年（1109）蔡京も左僕射から罷免され、大観４年には、彗星の出現により、杭州居住という処分をうける。かれらを徽宗はすぐに京師に呼び戻すわけであるが、このような政治過程を通じて、徽宗は自身に権力があることを再確認することになったのではないか。兄の急死と



張択端『清明上河図』故宮博物館蔵　　部分



欽聖皇太后向氏の意思によって偶然与えられた帝位であるとし、徽宗は当初は主体性を発揮しなかった。蔡京に委任し父兄の政治を踏襲する「紹述政治」が行われていた。その体制から自立するときが来たのである。

蔡絛の『鐵囲山叢談』には、

> 政和の初め、上、始めて躬ずから權綱を攬る。諸大臣に付するを欲せず。因りて藝祖の故事に述い、馬に御し、親ずから大内諸司務を巡る[31]。

とある。政和元年（1111）ごろから、徽宗は親政を志したことが示されている。これまでは、「諸大臣に付」していた。それが変化したのである。蔡京の末子蔡絛が執筆した『鐵囲山叢談』ではあるが、自らが関わらない政治的な潮流に関しては客観的な史料として利用できよう。

3.瑞鶴の乱舞　―　寒冷化と祥瑞の頻出

大観４年（1110）５月に再び彗星（1106 年の大彗星と同じクロイツ群に属する）が出現し翌年政和と改元される。もう一つ徽宗を悩ませていたのは、この頃天候不順が続いたことである。大観３年（1109）には、「秋江淮大旱」「自六月不雨至十月」「冬十月大雨震雹」と『宋史』には記されている。この時期の中国は寒冷化した時期であったことは古気象学の知見から知られている[32]。

そんな中で、杭州に蟄居した蔡京に代わり宰相（右僕射）となったのが張商英である（左僕射は蔡京派の何執中）。大観 4 年（1110）6 月、張商英が宰相に任命された日、長く続いた日照りが終わり、久々に雨が降ったため、徽宗は彼に「商霖」[33]と揮毫して下賜した。これだけ徽宗から期待されていた張商英だった。一方の張商英は大観４年（1110）９月「袁州瑞禾図」を献上[34]している。瑞禾が出現した祥瑞を図に描いたものを示し、彗星出現と天災の報告に苦悩する皇帝の歓心を得ようとしている。

張商英は蔡京の政策に反対したが、祥瑞を用いて皇帝のストレスを解消しようとした点では、芸術家肌で神経質な徽宗の臣下であった。ただし、土木工事の抑制を図ったため、徽宗から疎んじられるようになり[35]、一年足らずで罷免されてしまった。徽宗はやはり「豊亨予大」を唱える蔡京の政治姿勢と親和性が高かった。蔡京は、財政的な不足を徽宗に苦言することがなかったという。

翌政和１年（1111）の春、徽宗は百日間病床にあった[36]。7 月に健康を取り戻した徽宗は、8 月張商英を外任（知河南府）に出す。翌年 5 月には、蔡京を致仕から現役に復帰させ、太師という官位をもって宰相の事を行わせる。蔡京は張商英・郭天信の獄を起こし、政敵の政治生命を絶っている。前項で指摘したように、この病の後、徽宗はより政治への積極性を持つようになった。ことさらに道教主義に大きく舵を切る。仏教徒として名高い張商英が失脚したことは関連していると思われる。張商英は仏教史

徽宗『瑞鶴図巻』（遼寧省博物館蔵）

においては「居士参禅」の代表者として知られている。かれは、配所で仏教を擁護する書（『護法論）を執筆する[37]。

ところで、「政和間、天下爭言瑞應」[38]というように、『宋史』の五行志などによると、政和初年より、祥瑞の報告が頻出している[39]。これ以前は、せいぜい 10 本単位で現れていた祥瑞が、万の単位を数えるようになり[40]、記録ができなくなるほどになったという 。度重なる大彗星の出現や寒冷化による天変地異に対抗するかのように祥瑞が出現した。ここにも政治文化の変化がみられる[41]。

明くる政和 2 年（1112）の 1 月 16 日に、都城開封の宮殿の正門宣徳門の上空に、鶴の群れが飛来し、折からの上元節の行事で集まっていた都人はその奇観に驚くことになる。宣徳門に出御していた徽宗は都人とともにそれを見る。以下は徽宗の題記である。

> 政和壬辰上元の次夕、忽ち祥雲の払鬱として、端門に低く映える有り。衆は皆な仰ぎてこれを視るに、たちまち群鶴の空中に飛鳴する有り。なお二鶴の鴟尾の端に対止し、頗る甚はだ閑適なる有り。余は皆な翺翔し、奏節に応ずるが如し。往来する都民は、首を稽（まげ）て瞻望し、歎異すること之を久しゅうせざるは無し。時を経るも散ぜず。迤（つづいて）邐西北隅に帰飛して散ず。この祥瑞に感じ、故に詩を作り以って其の実を紀す[42]。

まさに祥瑞の光景を皇帝と都人が共有したのである。「与民同楽」の政治空間として非常に印象的なものである。図巻には、鶴と宣徳門（端門）姿しか描かれていないが、ここに描かれていない皇帝・百官・都人群衆の姿、そしてかれらの歓声が響くかのようである。この吉兆図と題記よりそれが読み取れる。このたびは、祥瑞の出現を君王と万民が共有した。これは、徽宗の権力・権威の荘厳という観点から重要な事件であったといえよう。

つづく題詩も注目される。

> 清暁　觚稜は彩霓を払い
> 仙禽　瑞を告げて忽ち来儀す
> 飄飄として元もと是れ三山の侶
> 両両として還また呈す　千歳の姿
> 碧鸞の宝閣に棲むに似擬し
> あに赤鴈の天池につどうに同じからんや
> 徘徊し嘹唳して丹（宮殿の正門）闕に当たり
> ことさらに憧憧とし庶俗をして知らしむ[43]

この詩では、群鶴を「仙禽」と表現するなど、道教世界の論理で説明されている。先述したように、「瑞鶴」出現の前年に、徽宗は「不予（ジュウビヨウ）」に陥る。100 日間の病臥の中で、道教世界における彼の地位を示唆する夢を見たことが歴史書には記されている。そのことを杭州にあった蔡京に伝え、道教主義に舵を切ることに協力を求めている[44]。蔡京を地方に出したものの絆は断たれていないのである。先述の『雪江帰棹図』をめぐる関わりである。

すなわちこの政和 1 年（1111）の不予、張商英（仏教主義者）の左遷、政和 2 年正月上元節の瑞鶴の出現は、後に政和 7 年に道君皇帝と称することでピークを迎える道筋への転換点である。

また、この事件を境として、『宋史』五行志に、

> 政和三年九月、大饗明堂、有鶴回翔堂上、明日、又翔于上清宮。是時、所在言瑞鶴、宰臣等表賀不可勝紀[45]。

とあるように、先ほどの芝草や嘉禾と同様に瑞鶴の出現が多数報告されるようになったのである[46]。北方に飛来するツルが、中原に頻繁に飛来したことは、この時期の寒冷化が影響しているとも考えられる。

4.内朝と皇帝専制体制の確立
―元符皇后の「暴薨」

藤本氏は、徽宗時代の後半において、「御筆手詔」という三省などの議論経ずに皇帝が発出する命令文書を用いることで、皇帝親政の政治を作られていったという[47]。「御筆手詔」については、徳永洋介氏に専論があり[48]、藤本氏もそれに依拠、発展している。基本的な史料とされているのは、『鐵囲山叢談』の以下の一節である。

> 政和三四年に及び、上自ら権綱を攬（と）るにより、政は九重（キュウチユウ）に帰す。しかる後皆な御筆を以て事に従う。ここにおいて宦者乃ち出で、復び自ら籍を顧みるなく、祖宗の垂裕（メイセイ）の模（のり）はゆらぐ。…しかして梁師成なる者は則ち坐して帷幄（いあく）に籌（はかりごと）す。その事任（ニンム）は古えの政を輔くる者に類す。ただ一時の宰相・執政は悉くその門に出で、中書門下の如きは、ただ文書を奉行するのみ。[49]

これによると、皇帝親政は政和 3 年（1113）ごろからはじまるのである。「九重」に政治権力が移動し、中書門下のような従来の行政機関が無力化していったことが示されている。とくに注目されるのが、政和 3 年 5 月に、「内朝」に六部に相当する組織が作られたことである[50]。同月現役復帰（落致仕）した太師蔡京には三日に一度都堂で政務に当たることが命じられている[51]。これは、外朝（中書門下を中心とする）の地位の低下と関連があるのではないか。内朝の問題について藤本氏も注目されており、漢代の「中朝を想起させる」ような重要な機関となったことを想定している。一方で、南宋時代の専権宰相に相当するようなものとして蔡京や王黼の「公相」としての立場をどのように捉えるのかが課題とされるという[52]。

宦官の政治との関わりは宋朝初期から抑制されていた（「祖宗の垂裕（メイセイ）の模（のり）」）。しかし、政和時代より内朝に政治の中心が移ったため宦官にその機会が生じた。特に徽宗に寵愛された宦官が梁師成である。彼は自ら蘇軾の隠し子を自称したように文才があり[53]、「隠相」[54]と称せられたほどの政治手腕を発揮した。政和・宣和の「佞臣」たちは、宦官たちに迎合あるいは結合し、結びつきをつよめ、それが政治的な成功につながった[55]。これは内朝に政治権力が集中した結果であろう。特に蔡京に代わって首席の宰相となる王黼は梁師成を父のようにしてつかえ「恩府先生」呼ぶほどであった[56]。邸宅も隣り合っていた。このような宦官と高級官僚との人間関係の結びつきは、藤本氏の課題に答える論点の一つなのではないか。政治制度ではなく、この時代特有の政治空間の問題を多分にふくむものであろう[57]。

内朝については、そこに棲む女性たちも考察しなければならない。内朝[58]の組織については、あまり分析されていないので難しい問題があるが、後宮の主は皇后である。先代の皇后が生存していれば皇太后として皇帝も無視できない権威をもつ。あまり注目されていないが北宋は「女主」の時代が長かった。真宗の皇后、章献明粛皇太后劉氏が仁宗初年 11 年にわたり垂廉聴政をおこなった（真宗の晩年にすでに病気の真宗に代わって政治を執っていた。）天聖の年号は二人の聖人を表しているといわれる。また、仁宗の后（慈聖光献皇太后）も英宗が病弱だったため一年あまり聴政している。英宗の后、宣仁皇太后は哲宗の元祐年間 8 年に垂廉聴政をおこない司馬光を登用し旧法を復活させている。神宗の皇后欽聖皇太后は、徽宗の初年に垂廉聴政[59]。というように、真宗・仁宗・英宗・神宗のいずれの皇后も皇太后として垂廉聴政を経験している。哲宗の皇太后はどうなのかと興味がわく。

哲宗の劉皇后（昭懐皇后・元符皇后）は、徽宗期には崇恩皇太后となった（以下、劉太后と略称する）。『宋史』徽宗本紀によると、劉太后は、政和 3 年（1113）2 月「暴に薨」じたという。このような書き方は、尋常の死に方でなかったことを表している。

劉太后は、哲宗の最初の皇后孟氏が党争に巻き込まれて廃された際に、新法派によって代わりに皇后に建てられた。建中靖国年間には、孟氏が一時的に復帰し元祐皇后と称され、一方の劉氏は元符皇后と称された。崇寧元年（1102）になると、蔡京らは元祐皇后をふたたび廃することを提案し徽宗はそれに従う。一方、翌崇寧 2 年（1103）に劉氏に皇太后の地位が与えられている。

「明豔冠後庭、且多才藝多」[60]とうたわれた劉氏は、哲宗の寵妃となり一男二女をもうけている。それゆえに宣仁皇后が立てた孟氏に対抗し、その廃后にも加担するなど野心的な女性であった。徽宗時代には政治に関与することも多かったという[61]。特に徽宗が 3 ヶ月あまり病に臥った政和元年（1111）、どうやら垂廉聴政による権力掌握を企んだらしい。先に見たように皇帝が病気の際に皇后や皇太后が聴政することは真宗や英宗に前例があることである。ただし、健康を回復し、親政を指向し始めた徽宗には看過し得ない問題だったようだ。それを記録するのが『皇朝編年綱目備要』巻 28、政和 3 年（1113）2 月の条である。

后、其の才を負い、毎に曰く「章獻明肅（真宗の皇后劉氏）、大いに誤れり。何ぞ裏より幞頭を起こし、出でて百官に臨まざる」と。上、嘗て蔡京に謂いて曰く「朕、前日大病あり。那箇（アノカタ）は便ち垂簾の意有り」と。那箇とは后を謂うなり。

又曰く「朕、関防せざるを得ず。人をして殿門に当り之に剣を与えしめ、若し宣召に非ざれば、何人なるかを問う勿く、門に入る者は便ち之を斬れと」と。是に至り、后は不謹を以て、疾無くして崩ず。死の日、天は黄霾（コウサ）の異常を為す。

始め事覚れしとき、上、輔臣に諭すに、后の謹まざることを以ってす。且つ重ねて曰く「不幸なり」と。京曰く「宮禁、比ごろ修造多し。凡そ事に防護を失えば、宜しく此等有るべし。且つ古今に自から故事有り。聖心の憂悶を煩わすに足らず」と。何執中、忽かに攙（ヨコカラハイツテ）進して曰く「太后の左右、陛下多く人を置き侍奉し、婦人女子を以て之に愧懼を加うるを願う。万一不虞（ホウギヨ）あれども、則ち陛下に嫂（あによめ）を殺すの名を負うべからざるなり」と。上、愕然として因りて曰く、「すなわち之を決するを欲せず。晩に当に卿を召し来りて議すべし」と。晩に果して召すを促し、輔臣既に殿に入り議して将に之を廃さんとす。而して太后已に崩ず。蓋し左右の逼る所と為り、自ら簾鈎に即きて縊す。

上曰く「孟氏已に廃されき。今崇恩又た廃せば、則ち泰陵（テツソウ）に配無し」と。会たま其れ已に崩ず。故に其の事を掩うと云う[62]。

この史料冒頭では、劉太后が、第 3 代真宗の章獻明肅皇太后の垂廉聴政とその権力に興味を持っていたことが示されている。それに対し、徽宗は苦々しくおもっていた。『宋史』本伝では、「頗干預外事、且以不謹聞。」[63]という理由から、徽宗は廃位することも考えていたほどだった。「不謹」とは、スキャンダラスな出来事を指すのであろう。一方で廃后した結果として、哲宗陵に陪葬される皇后がいなくなるのも具合が悪い。そこで、徽宗あるいは宰相（太師蔡京・太宰何執中）の意を受けた近習によって迫られて自死させられたのであろう。享年 35 歳だった。皇太后の死去に伴う葬礼は行われなかったようだ。その年の 5 月には、哲宗の陵墓（永泰陵）に葬られている[64]。

詳細はよく分からない出来事であるが、結果的には、徽宗は劉太后を除くことによって、後宮（内朝）を掌握することに成功したことになる。劉太后の薨去の 3 ヶ月後に、内朝に六部に相当する組織が完成している。この事件についての詳細は「掩」われてしまいわからないところも多いが、皇太后を死に追い込まざるをえないような問題があったことは確かであろう。

皇太后崩御のその年の 11 月、郊祀大礼が行われた。道士 100 人を行列の先触れとして参加させた。この頃より、道教主義が顕在化するのである。12 月には全国から道教の経典を集めさせる[65]。翌年正月には道階 26 等を設置する。一方で仏教弾圧や艮岳の建造もはじまる[66]。

外戚勢力の弱体化と野心的な皇太后の粛清は、内朝における徽宗の専権を強めたことだろう。内朝の宦官たちと外朝の官僚機構との関係も深いものとなった。その外側の都城空間においては、都人に対して「与民同楽」[67]の行事（上元観灯・金明池争標・郊祀など）により人心掌握がおこなわれた。徽宗は専制君主としての権威を身にまとうため、「道君皇帝」への道を進んで行くことになる。林霊素の神霄説を採用し、「長生大帝君」が地上に降下した現人神として君臨する。政和 7 年（1117）長生大帝君の像を安置する神霄玉清万寿宮は全国州軍監に設置され[68]、宋朝版図全体を巻き込む君権強化がおこなわれたのである[69]。

おわりに.『清明上河図』と『千里江山図』の間

劉太后が「暴薨」に追い込まれるという痛ましい出来事があった二ヶ月の後、政和３年（1113）閏４月に『千里江山図』（北京故宮博物院藏）が画院で完成し、蔡京に下賜された[70]。蔡京はこれに先だって題跋を書き込んでいる。この絵画は、天才少年画家として知られる王希孟の作品である。王希孟を見いだしたのは蔡京である。王希孟に画業を仕込んだのはほかならぬ徽宗なのである。すなわちこの『千里江山図』は、３人の合作ともいえる[71]。その画題は、江南風の山水である。徽宗・蔡京の「豊亨予大」の美学に満ちあふれている[72]。同じ頃に制作された『瑞鶴図』に近い幅の絹に描かれている（幅 51.5 ㎝、この幅の半分の画布で描かれたのが『清明上河図』）。曽布川寛氏によると、江南の山水を天才的な筆致と独特の色彩でえがいたこの長巻は道教的世界を描いたものだという[73]。徽宗が道教主義による国家統合と権力・権威の強化をはかることの宣言とも

王希孟『千里江山図』（部分　北京故宮博物院蔵）

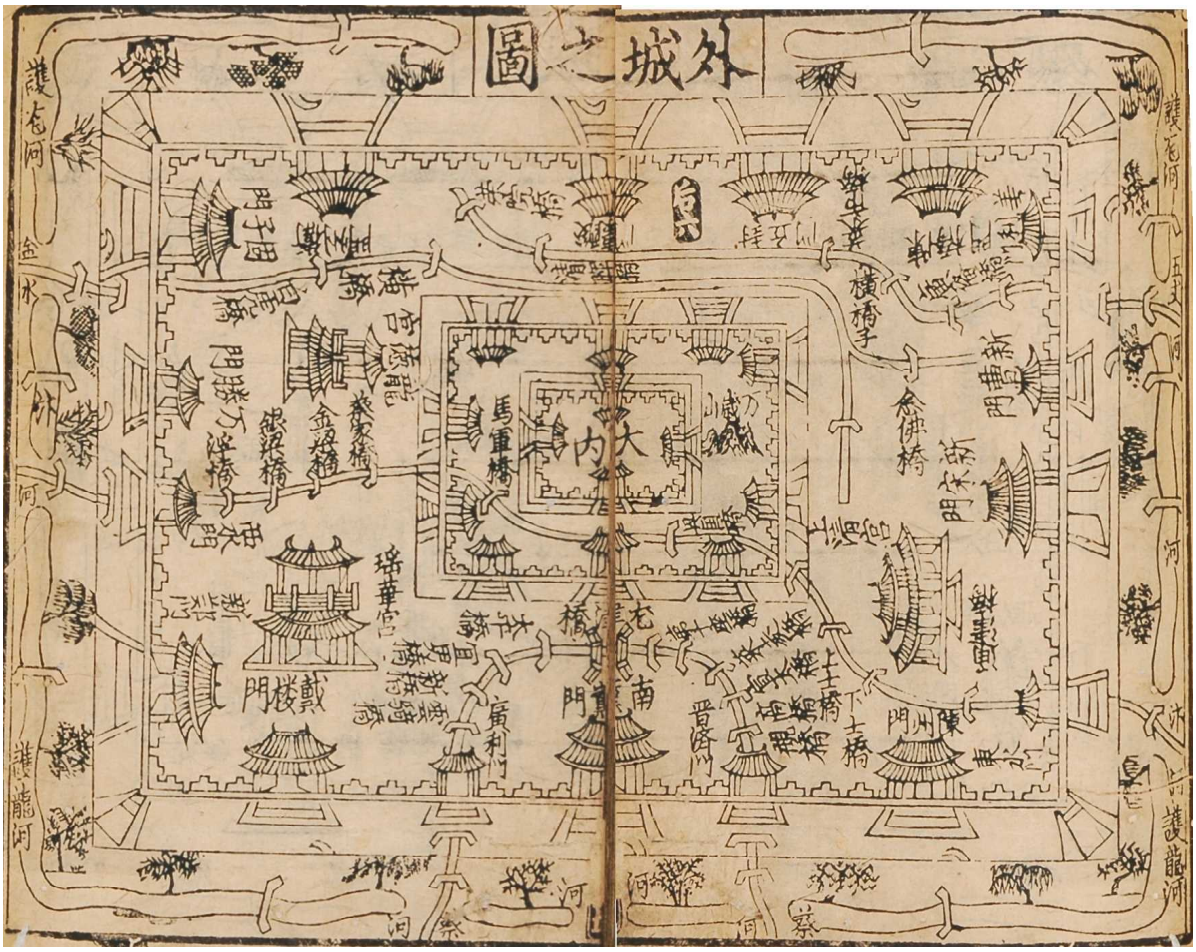
いえる図巻である。

一方で、『清明上河図』は、『千里江山図』より 5 ～ 10 年前ぐらいに制作されたと考えられる。同じように画院の画家が描き臣下（向氏）に下賜されたものだ。こちらは庶民の消費生活の繁盛という「与民同楽」の儒教的[74]な理想世界を描いている。北方中国の透明な空気を感じさせる『清明上河図』には、霞たなびくような道教的な要素は見られない。仏僧の姿も数人見られる。800 名ともいわれる人物描写は精緻を窮め、画巻中に余白は存在しない。そこには職業画家として技巧が存分に生かされている。しかしそれは徽宗の主張した絵画観（文人画）とは違ったものだった。

この両図巻のコントラストは、文人画（宣和体）への「絵画の変」[75]とともに、徽宗朝における政治的な転回をしめすものといえるのではないか。父兄の政治を継承する「紹述」をスローガンとした「崇寧」と、自らの政治を指向した「政和」の対照である。『清明上河図』を神品とした向氏の美意識と、徽宗＝蔡京の美意識の違いとしても意識すべきであろう。徽宗初年には、向宗回らと蔡京の政治的な結びつきは多くの言官の批判の的となっていたのである[76]。ここでは徽宗の変化に即応する蔡京のオポチュニストぶりが際立つ[77]。

政和・宣和時代、徽宗は、蔡京・王希孟とともに確認した美学によって、こんどは都城開封の景観も変化させてゆくことになる。そのシンボルが艮岳（万歳山）の造営である[78]。その周辺は江南風村落の景観に作り替えられてゆく[79]。建造物には宮殿独特の華やかな色彩（五彩）は避けられた[80]。数多くの園林には、大運河により運ばれてきた太湖石が積み重ねられていった。こうして「道君皇帝」の都が整備された。開封には全国からはおびただしい数の祥瑞出現が報告され瑞物が献上される。徽宗が艮岳を訪れる際には、絵画のように雲がまかれたが、これは地方から献上された「貢雲」[81]だった。瑞獣・瑞禽は艮岳などで飼育され[82]、やはり徽宗が訪れるときには解き放たれた。艮岳は『千里江山図』の世界を現実化したものともいえるのではないか。艮岳とは、瑞物を通じて地方と中央をつなぐ一つのシステム、あるいは政治空間とも定めることが可能であろう[83]。（次ページの『事林広記』外城之図には、艮岳（万歳山）や龍徳宮・上清宮・瑶華宮など道教施設だけが描かれている。「道君皇帝」が住まう「宣和の開封」を描いた絵地図といえる。）

艮岳周辺の景観は、『清明上河図』のそれと対照的なものになっていったのである。皇帝のための空間（禁苑）が宮城の北側に広がり[84]、「与民同楽」とは別の空間がひろがった。『千里江山図』に代表される「豊亨予大」という政治文化の流れといえよう。やがて都人たちは、禁苑から夜な夜な響き渡る瑞獣・瑞禽の奇声に不吉な予感を感じるようになった。宣和末年徽宗が退位し、金軍の包囲をうけるや、艮岳に作られた白木造りの殿閣は破壊され極寒をしのぐ都人の薪として活用される[85]。陥落後は、都人たちは障壁を押し倒して艮岳に入り「顛（いただき）」に避難した。艮岳には雪が降り積もっていた。都人らははじめてその美観を実感したという[86]。



「外城之図」　『新編纂図増類羣書類要事林広記』（東京　国立公文書館蔵　西園精舎　元刊本　）後集　巻 6 に掲載

【参考文献】

安藤智信 1963「張商英の『護法論』とその背景」『大谷学報』42 巻 3 号

板倉聖哲 2019「北宋絵画としての「清明上河図」」東京国立博物館篇　『決定版「清明上河図」』国書刊行会　所収

梅原郁 1995「刑は大夫に上らず - 宋代官員の處罰 -」『東方学報』67 巻

久保田和男 2007『宋代開封の研究』汲古書院

久保田和男 2012「メディアとしての都城空間と張択端『清明上河図』」『「清明上河図」と徽宗の時代』勉誠出版

佐藤裕久 2018「今世紀に太陽をかすめる大彗星の再来はあるか～ Kreutz 群の変遷と捜索について～」『天界』2018 年 1 月号

曽布川寛 2019「李唐筆万壑松風図と艮嶽」『古文化研究―黒川古文化研究所紀要』第 18 号

塚本麿充 2019「徽宗朝における宮廷文物の収蔵・展観活動と「清明上河図」の淡彩表現」『決定版「清明上河図」』所収

塚本麿充 2016『北宋絵画史の成立』中央公論美術出版社

寺地遵 1967「天人相関説より見たる司馬光と王安石」『史学雑誌』76 編 10 号

寺地遵 1968「欧陽脩における天人相関説への懐疑」『広島大学文学部紀要』28(1)

徳永洋介 1998「宋代の御筆手詔」『 東洋史研究』57 巻 3 号

西川勝 2010『宣和画譜小考』山形大学紀要（人文科学）第 17 巻第 1 号

福澤仁之・安田喜憲 2008「水月湖の細粒堆積物で検出された過去 2000 年間の気候変動」『歴史と気候（新装版）』『講座文明と環境』第 6 巻、朝倉書房

藤本猛 2014『風流天子と「君主独裁制」―北宋徽宗朝政治史の研究』京都大学学術出版会

● 久保田和男 2015　書評 『東洋史研究』74 巻 1 号
平田茂樹 2012『宋代政治構造研究』汲古書院
久井貴世 2013「江戸時代の文献史料に記載されるツル類の同定」『山階鳥学誌』45
深澤一幸 2013「徽宗「瑞鶴図」の風景」『言語文化研究』39 号
パトリシア＝イーブリ 2004「徽宗朝の秘書省と文化財コレクション」『アジア遊学 64』勉誠出版
Ebrey,Patricia Buckley 2008"Accumulating Culture: The Collections of Emperor Huizong", University of Washington Press
宮崎法子 2019「「清明上河図」の過去と現在―今後の研究に向けて」『決定版「清明上河図」』所収

曹星原 2011『同舟共済 ： 《清明上河图》与北宋社会的冲突妥协』石頭出版
曹星原 2019「市易法を描く絵画 ―― 再読「清明上河図」」『決定版「清明上河図」』所収
陳韻如 2019「張択端「清明上河図」の画意の再検討」『決定版「清明上河図」』所収
程民生 2012『北宋开封气象编年史』人民出版社
葛全胜・方修琦・ 郑景云 2002「中国历史时期温度变化特征的新认识」1997『地理科学进展』21 卷 4 期
河南省文物考古研究所 1997『北宋皇陵』中州古籍出版社
刘凯 2015「张择端清明上河图创作时间刍议-兼与曹星原先生商榷」『阅江学刊』 第 2 期
刘次沅 1987「中国古代天象记录中的尺寸丈单位含义初探」『天文学报』28 卷第 4 期
彭慧萍 2017「诡谲气象―― 徽宗朝雪景暨蔡京题跋之政治意涵」 杨丽丽主编『千里江山图的故事』故宫出版社
孙小淳 2004「北宋政治变革中的天文灾异论说」『自然科学史研究』 23 卷 3 期
楊新 2019「「向氏評論図画記」新解」(『決定版「清明上河図」』所収)
杨丽丽 2017「千里江山图研究纪程」杨丽丽主编『千里江山图的故事』故宫出版社
余辉 2017「三个人的千里江山图―― 王希孟、徽宗和蔡京的用意」『千里江山图的故事』所収
余輝 2019「張択端「清明上河図」新探」『決定版「清明上河図」』所収
竺可桢 1972「中国近五千年来气候变迁初步研究」『考古学报』1972 年 1 期
习忠民1995『两宋御史中丞考』巴蜀出版
张邦炜 1993『宋代皇亲与政治』四川人民出版社

Zdenek Sekanina and Paul W. Chodas 2004 "FRAGMENTATION HIERARCHY OF BRIGHT SUNGRAZING COMETS AND THE BIRTH AND ORBITAL EVOLUTION OF THE KREUTZ SYSTEM. I.TWO-SUPERFRAGMENT MODEL" The Astrophysical Journal, 607: 620–639

【注】

1)〔竺可桢 1972〕〔程民生 2012〕〔福澤・安田 2008〕など。

2)〔佐藤 2018〕〔Zdenek Sekanina and Paul W. Chodas 2004〕など。

3)『鐵囲山叢談』巻 1、中華書局 1983、13 頁に、徽宗時代の年号の由来について記されている。
太上即位之明年改元建中靖國者、蓋垂簾之際、患熙・豐、元祐之臣爲黨、故曰建中靖國。實兄弟爲繼、故踵太平興國之故事也。明年親政、則改元崇寧。崇寧者、崇熙寧也。崇寧至五年正月彗出、迺改明年爲大觀。大觀者、取易「大觀在上」、但美名也。大觀至四年夏五月彗出、因又改明年爲政和。政和者、取庶政惟和之義也。政和盡八年、時方士援漢武故事、謂黃帝得寶鼎神策、是歲己酉朔旦冬至、爲得天之紀、而漢武但辛巳朔旦冬至、然今歲迺己酉朔旦冬至、真得天之紀矣。又太宗皇帝以在位二十年、因大赦天下。是時上在位已十有九年、明年當二十年。舉是二者、乃下赦改十一月冬至朔旦爲重和元年。重和者、謂「和之又和」也。改號未幾、會左丞范致虛言犯北朝年號。蓋北先有重熙年號、時後主名禧、其國中因避「重熙」、凡稱「重熙」則爲「重和」、朝廷不樂。是年三月遽改重和二年爲宣和元年。宣和改、上自以常所處殿名其年、然實欲掩前誤也。自號宣和、人又謂一家有二日爲不祥、及方臘起、連陷二浙數郡、上意彌欲易之、獨難得美名。會寇甫平而止、七年冬遂内禪云。

4)『鐵囲山叢談』巻 1、2 頁：宣和歲乙巳冬十二月、報北方寒盟。二十有三日、上皇有旨内禪。時去歲盡不數日。故事、天子即位踰年即改元、於是中書擬造、取「日靖四方、永康兆民」二句、請號年曰「靖康」焉。靖康之初、今上在康邸、因出使講解而威德暴天下、故識者多疑以爲靖康於字焉「十二月立康」也。是後一年而中興。

5)〔藤本 2014〕44-45 頁によると、元符 3 年（1100）における向太后の垂廉聴政期は、韓忠彦が宰相に就任しどちらかというと旧法派の復権が行われていた。向太后の政治的影響力が薄れるなかで（1100

年 1 月死去)、徽宗と新法穏健派の曾布（もう一人の宰相）が、政治の指導権を握り、新旧の融和がはかられた。ただし、徽宗が心変わりし徹底的な新法路線を取るようになり、蔡京が宰相に就任する。

6）〔刘次沅 1987〕397 頁によると、中国古代の天象記録の 1 尺は約 1 度に相当するという。

7)『宋史』巻 56、天文志、中華書局 1980、1228 頁。

8)〔Zdenek Sekanina and Paul W. Chodas 2004〕629 頁 の付表に、1106 年と 1110 年彗星のクロイツ群における位置づけが明らかになっている。参照されたい。

9) ドイツの天文学者ハインリヒ・クロイツが、サングレーザーの多くが、数百年まえに分裂した非常に巨大な彗星の破片であることを見いだしたことに依る。〔佐藤 2018〕

10)〔佐藤 2018〕を参照。

11)〔孙小淳 2004〕

12)〔寺地 1967〕〔寺地 1968〕

13)『皇朝綱目編年備要』巻 27、崇寧五年正月、中華書局、2006、689 頁には「始(ママ)彗初見、上震動責己、深察京之姦、由是旬日之間、凡京所爲者、一切罷去。」とある。〔藤本 2014〕は徽宗と蔡京の外交政策上の対立が背景とあり、彗星の出現（星変）は政変のきっかけに過ぎないとする。

14) 現在、広西自治区桂林近郊に、2 枚の元祐党藉碑が残っているが、いずれも南宋時代に重刻されたものだという。（融水苗族自治県民族博物館／桂林龍隠岩龍隠洞）。蔡京が自筆で書いたものとされ、書法の資料としても重要とされている。

15)〔余輝 2019〕107 頁・124 頁では、1102 年~1106 年とする。〔板倉聖哲 2019〕134 頁では、1104 年~1108 年とする。〔劉凱 2015〕は、1108 ～ 1110 年とする。一方で、〔曹星原 2011〕は、「宣和体」ではなく、神宗元豊時代の作品とし、内容から 1079 年の清汴完成後としている（129 頁、177 頁）。曹氏は、神宗時代にえがかれた新法批判の図巻として『清明上河図』を解釈し、徽宗時代の作であるという定説に反対する。

16)〔久保田 2012〕〔塚本 2016〕354 頁。

17)『決定版清明上河図』228 頁の釈文。

18)〔塚本 2019〕161 頁を参照。

19)〔余辉 2017〕168 頁。

20)〔イーブリ 2004〕〔塚本 2016〕309 頁などに皇帝コレクションとしての徽宗文物が紹介される。

21)〔楊新 2019〕204 頁

22)〔张邦炜 1993〕239 頁

23)『東都事略』巻 119、向宗回伝、汲古書院 1973、446 頁。二年有告宗回帷薄不修者。令開封府府鞫治、御史中丞呉執中臨問、召所使季吹笙、引宗回女並張響鐵等、驗問。與得其實。遂以太子少保致仕。執中言、陛下以宗回元舅之故、不忍致之法、奈天下何。詔曰、宗回於欽聖憲肅皇后爲親弟、朕以噬膚之恩、不忍行法。其削奪在身官爵。郴州安置。行一二日。追還。逾年、盡復故職。

24) 呉執中の政治的な立場については、〔习忠民 1995、162 頁〕を参照。呉執中は蔡京や鄭居中に対して弾劾文を出すなど、反蔡京、反外戚を貫いている。

25)「安置」は、指定の州軍（できれば州城）から出ず、然るべき謹慎生活を送るという処分であり、新法政権下、蘇軾兄弟が受けたものと同じである。〔梅原 1995〕271 頁を参照。

26)「居住」は「安置」より軽い処分である。〔梅原 1995〕277 頁を参照。

27) 図巻とともに蔡京題跋も、故宮博物院のホームページ掲載の写真版で見ることができる。https://www.dpm.org.cn/collection/paint/228507.html

28)〔彭慧萍 2017〕266 頁

29)〔曹星原 2011〕17 頁、挿図 2 の説明文を参照。

30)〔藤本 2014〕39 頁に、蔡京と向氏兄弟との交通が触れられている。陸游『家世舊聞』巻下、中華書局 1993、215 頁には「…俄而太后歸政、則又曰京結外戚向宗回・宗良、内臣張琳、劉瑷、裴迪臣。故太后雖歸政、預政事。…」とある。また『宋史』巻 105、陳師錫伝など。

31)『鐵囲山叢談』巻 1、18 頁。政和初、上始躬攬權綱、不欲付諸大臣。因述藝祖故事、御馬親巡大内諸司務。

32)〔竺可桢 1972〕〔程民生 2012〕〔福澤・安田 2008〕37 頁などを参照。また、NASA の気候変動サイトにあるグラフを参照。https://earthobservatory.nasa.gov/features/GlobalWarming/page3.php

33)『尚書』商書、説命上にみえる故事より、商霖とは宰相を賞賛する言葉となったという。

34)『宋史』巻 64、五行志、1408 頁。台北国立故宮博物院には元代の「嘉禾圖」が現存しており参考になる。〔塚本 2016〕305 頁によると、嘉禾は吉祥のなかで特に重要なもので図に描いて鑑賞した記録が多いという。

35)『宋史』巻 351、張商英伝、11097 頁を参照。

36)『宋史』巻 20、徽宗本紀、政和元年七月壬申、386 頁には「以疾愈、赦天下」とある。『十朝綱要』巻 17、『宋史資料萃編』文海出版 1975、394 頁、「（政和元年）七月、上不豫将百日、至是康復、壬申、降德音

於天下。」とある。

37)〔安藤 1963〕

38)『宋史』巻 352 王安中伝、11124 頁

39)『宋史』巻 63、五行志、1395 頁：政和元年正月萊州芝草生。十一月、虔州聖祖殿芝草生。二年二月戊子、河南府新安県蟾蜍背生芝草、自是而後、祥瑞日聞。玉芝產禁中殆無虛歲、凡殿宇、園苑及妃嬪位皆有之。外則中書尚書二省、太學、醫學亦產紫芝。…有司不勝其紀。初猶表賀、後以爲常、不皆賀也。

40)『鐵囲山叢談』巻 1、12 頁：政和初、中國勢隆治極之際、地不愛寶、所在奏芝草者動三二萬本、蘄黃閒至有論一鋪在二十五里、徧野而出。汝海諸近縣、山石皆變瑪瑙、動千百塊、而致諸輦下。伊陽太和山崩、奏至、上與魯公皆有慚色。及復上奏、山崩者、出水晶也。以木匣貯之進、匣可五十斤、而多至數十百匣來上。又長沙益陽縣山溪流出生金、重十餘斤。後又出一塊、至重四十九斤。他多稱是。

41)南宋高宗は芝草が献上されると、それを却下するという徽宗とは正反対の姿勢を見せている（『宋史』巻 63、五行志、1396 頁）。

42)政和壬辰上元之次夕、忽有祥雲拂鬱、低映瑞門。衆皆仰而視之、倏有群鶴飛鳴於空中、仍有二鶴、対止於鴟尾之瑞、頗甚閑適。餘皆翺翔、如應奏節。往来都民、無不稽首瞻望、歎異久之。經時不散、迤邐歸飛西北隅散。感滋瑞祥、故作詩以紀其實。（〔深澤 2013〕93 頁図 2 を参照。）

43)清曉觚稜拂彩霓　仙禽告瑞忽來儀　飄飄元是三山侶　兩兩還呈千歲姿　似擬碧鸞棲寶閣　豈同赤鴈集天池　徘徊嘹唳當丹闕　故使憧憧庶俗知（同上）

44)『資治通鑑長編紀事本末』巻 127、文海出版 1967、3817 頁、「道学」大観２年 5 月辛亥の条に引用の蔡絛『史補・道学者流編』を参照。

45)『宋史』巻 64、五行志、1410 頁。

46)〔深澤 2013〕

47)〔藤本 2014〕

48)〔徳永 1998〕

49)『鐵囲山叢談』巻 6、109 頁。及政和三四年、繇上自攬權綱、政歸九重、而後皆以御筆從事。於是宦者乃出、無復自顧藉、祖宗垂裕之模盪矣。　…　而梁師成者、則坐籌帷幄、其事任類古輔政者。一時宰相執政、悉出其門、如中書門下、徒奉行文書。

50)〔徳永 1998〕23 頁を参照。

51)『資治通鑑長編紀事本末』巻 131、蔡京事跡、政和 2 年 5 月己巳、3995 頁には、「太師、楚国公致仕蔡京落致仕、三日一日至都堂治事。 」とある。

52)〔藤本 2014〕480 頁。

53)『宋史』巻 468、梁師成伝、13662 頁。

54)『鐵囲山叢談』巻 6、111 頁。

55)『鐵囲山叢談』巻 6、110 頁によると、「政和以（コノカタ）還、侍従大臣、多奴事諸璫（カンガン）、而取富貴…」とある。王黼は梁師成、盛尹章は向忻、宋昇は王仍、王安中は梁師成に「事」え富貴を得ていたという。

56)『鐵囲山叢談』巻 6、111 頁には、「宣和以降、則士大夫悉帰之内寺之門矣。黼則呼師成爲恩府先生、毎父事之。」とある。

57)〔久保田 2007〕では道教の進出に注目して、徽宗時代の開封都城空間について考えていたが、宦官などへの賜第などを含めて再検討の課題となろう。

58)内朝については〔平田 2012〕414 頁を参照。従来も皇帝と宰相を初めとする官僚との政策協議（視朝）など日常的な皇帝の政務はここで行われていた。

59)〔张邦炜 1993〕143 頁を参照。

60)『宋史』巻 243、昭懐皇后伝、8638 頁。

61)『宋史』巻 243、昭懐皇后伝、8638 頁「帝（徽宗）縁哲宗故、曲加恩禮、后以是頗干預外事、且以不謹聞。帝與輔臣議、将廢之…」

62)『皇朝編年綱目備要』巻 28、政和 3 年（1113）2 月、707 頁。后負其才、毎曰、章獻明肅大誤矣。何不裹起幞頭、出臨百官。上嘗謂蔡京曰、朕前日大病、那箇便有垂簾意。那箇者、謂后也。又曰、朕不得不闊防。使人當殿門、與之劒。若非宣召、勿問何人、入門者便斬之。至是、后以不謹、無疾而崩。死之日、天爲黄霾異常。始事覺、上諭輔臣以后不謹、且重曰、不幸。京曰、宮禁比修造多、凡事失防護、宜有此等。且古今自有故事、不足煩聖心憂悶。何執中忽攙進曰、太后左右、願陛下多置人侍奉。以婦人女子、加之愧懼。萬一不虞、則陛下不可負殺嫂之名也。上愕然、因曰、不欲即此決之、晩當召卿来議。晩果促召、輔臣既入殿。議將廢之、而太后已崩。蓋爲左右所逼、自即簾鈎而縊焉。上曰、孟氏已廢。今崇恩又廢、則泰陵無配矣。會其已崩、故掩其事云。

63)『宋史』巻 243、昭懐皇后伝、8638頁

64)永泰陵ならびに昭懐劉皇后陵については、河南省文物考古研究所『北宋皇陵』中州古籍出版社、1997、254 頁以下を参照。一方の元祐皇后（隆祐皇太后孟氏）は、数奇な運命によって、北宋と南宋をつなぐ役割をはたす。張邦昌は元祐皇后を宋皇太后として垂廉聴政の位置につかせる。また、高宗即位後も隆祐皇太后として、宋朝復興のシンボルとして活躍した。1129 年の明受の変においては、垂廉聴政を行い変事を収拾している。陵墓は紹興市郊外の南宋六陵にある。

65)『十朝綱要』巻 17、政和 3 年 12 月癸丑、文海出版 1975、401 頁

66）祖秀「華陽宮記」曰：政和初、天子命作壽山艮嶽於禁城之東陬、詔閹人董其役。舟以載石、輿以輦土、驅散軍萬人、築岡阜、高十餘仞。增以太湖靈璧之石、雄拔峭峙、功奪天造。石皆激怒抵觸、若碪若齒、牙角口鼻、首尾爪距、千態萬狀、殫奇盡怪。輔以磻木瘿藤、雜以黃楊、對青竹蔭其上。又隨其斡旋之勢、斬石開徑、憑險則設磴道、飛空則架棧閣、仍於絕頂、增高樹以冠之、搜遠方珍材、盡天下蠹工絕伎而經始焉。（張淏『艮嶽記』（『叢書集成初編』）3頁）

67）『宋史』巻 351、何執中伝、11102 頁には、「政和二年、大長公主喪、罷上元端門觀燈、執中言「不宜以長主故闕衆情、願特爲徙日、以昭與民同樂之意。」帝重逆其請、爲申五日期。」とある。政和 2 年に、上元観灯の期間を延長している。

68）『資治通鑑長編紀事本末』巻 127、神霄宮、政和 7 年 2 月辛未、3835 頁。

69）〔久保田 2007〕を参照。

70）「千里江山图」蔡京跋文による。

71）〔余辉 2017〕136 頁以降を参照。

72）〔余辉 2017〕158 頁以降を参照。

73）〔曽布川 2019〕29 頁下段に、『千里江山図』の徽宗朝時代における意義が以下のように簡潔に紹介されている。「俯瞰的に捉えられた華麗な江水の広がりや大小の山岳が連綿とうち続いている。とてもこの世とは思えぬ神仙的な趣きの世界であるが、これこそ徽宗が長生大帝君として天上世界から降り君臨したこの世の理想的な姿であったろう。これも一種の瑞祥画であり、徽宗の思い描いた地上の楽園を窺う貴重な作品といえる。」

74）〔陳韻如 2019〕によると、詩經の章句がこの長巻からは読み取れるという。

75）文人画を重視する絵画観への転回は、「絵画の変」とも称せられている〔西川 2010 3 頁〕。曹星原氏は、これを「宣和体」と称している。そして、『清明上河図』は「宣和体」とは異なる美学によって制作されており、したがって徽宗朝時代のものではないという〔曹星原 2011〕。

76）〔藤本 2014〕43 頁を参照。

77）元符皇后に対しても、蔡京は哲宗時代は迎合していたが、その自死の事件では徽宗の相談をうけており、庇ったりはしていない。

78）〔曽布川 2019〕によると、李唐『万壑松風図』（宣和 6 年制作、台北故宮博物院蔵）は艮岳を描いたものという。

79）『宋史』巻 64、五行志、1410 頁には「政和後、禁苑多爲村居野店」

80）〔久保田 2007〕292 頁。『資治通鑑長編紀事本末』巻 128、萬歲山の項、3877 頁に引用する蔡絛『宮室苑囿篇』を参照。

81）『斉東野語』巻7、贈雲貢雲、華東師範大学出版社1987、126頁。

82）『宋史』巻 64、五行志、1410 頁には「政和後、…又聚珍禽、野獸、麀鹿、鴛鴦、禽鳥數百實其中。至宣和間、每秋風夜靜、禽獸之音四徹、宛若深山大澤陂野之間、識者以爲不祥。」とある。

83）これは、地方から至る瑞物を描いた絵画を展覧する宣和殿も同様な役割を担う政治空間である。塚本氏は、瑞兆画などを高麗などの外国使節に閲覧させることの政治的な意味を明らかにしている（〔塚本 2016〕第三章「北宋宮廷文物公開の場と鑑賞者」）。

84）『中興小記』26 巻、福建人民出版社 1985、308 頁に見える「北宮夾城」と呼ばれる空間がそれに当たるようだ。

85）『資治通鑑長編紀事本末』巻 128、萬歲山、3880 頁の項。

86）張淏『艮嶽記』（『叢書集成初編』）5 頁、祖秀「華陽宮記」曰…靖康元年閏十一月、大梁陷、都人相與排牆、避虜於壽山艮嶽之顛。時大雪新霽、邱壑林塘、傑若畫本、凡天下之美、古今之勝在焉。祖秀周覽累日、咨嗟驚愕、信天下之傑觀、而天造有所未盡也。明年春、復遊華陽宮、而民廢之矣。